

「御伽草子」という名称について考える

染谷 裕子

一 はじめに

「御伽草子」という名称は、文学史上で一般に「室町時代から江戸初期にかけて作られた物語草子の総称」(『日本古典文学大辞典』岩波書店)として用いられる。⁽¹⁾一方で、この名称が、後に述べるようににそもそも江戸中期の書肆によって「酒吞童子」「鉢かづき」等の二十三篇の叢書として名付けられたために、これら二十三篇のみを「御伽草子」とも呼ぶ。

従って、御伽草子なる名称を用いる時に、広義の御伽草子、狭義の御伽草子などと一々断る必要も出てくる。

一方、その混乱を避けるために、あるいは名称自体に問題があるとして、広義の御伽草子を「室町物語」、「中世小説」等と呼ぶ場合も少なくない。そのため、近頃、論文に必ず付するようになったキーワードをいかにするか悩む場合も少なくない。実際、研究者によっては御伽草子、室町物語、中世小説等の名称を転々と使用している場合もありうるのではないか。

市古貞次によれば「御伽草子」という名称は、江戸中期に刊行さ

れた叢書「御伽文庫」の別称として用いられたことに端を発するといふ。⁽²⁾「御伽文庫」とは、享保の頃(それ以前とする説もある)、大

坂の書肆渋川清右衛門が出版した二十三篇の叢書名である。それが別称御伽草子(あるいは文庫の一冊を御伽草子と呼んでいたのかもしれないといふ)と呼ばれるようになり、享和元年(一八〇一)の尾崎雅嘉『群書一覽』に「御伽草子二十三巻一名御伽文庫といへり」とあることから、市古は「時の推移につれて御伽文庫という叢書名がだんだん影が薄くなり、御伽草子の名が広まったらしい」とする。そして、江戸時代においては、この「渋川版御伽文庫」の後、これに収められた二十三篇に類する、いくつかの物語草子をも「御伽草子」と呼んでいるが、その例はまれであったという。

なお、渋川版叢書を「御伽文庫」「御伽草子」と呼んだ時点で、「御伽」という語が「婦女童幼の慰めとする」という意味を持つていたということが、この名称の問題と大きく関わることになる。

さて、江戸時代には大方二十三編の範囲を出ることがなかった「御伽草子」が、明治以降にはその範囲を広げ、いわゆる広義の「御伽草子」をも意味するようになった。

この広義の御伽草子の名称の是非について考えることは、結局は御伽草子とは何ぞやという根本的な問題を解き明かすことでもある。そのためには、数百編とも言われる作品、およびそれらの作品のおびただしい伝本を隈無く調査した上ではじめて解き明かされるものであつて、名称論以前になされるべきことが多々あるわけである。従つて、様々な立場から論じた数多くの御伽草子に関する論考の中で、正面から御伽草子の名称論を取り扱ったものは決して多くはない。もちろん「御伽」の意味をめぐる様々な議論はなされてきたが、専門用語として広義の御伽草子の適否について正面から論じたのは市古貞次と藤井隆であつた。⁽⁴⁾

市古貞次は、その著書『中世小説の研究』において、「とき」の意味の変遷を確認した上で、「御伽草子」が江戸中期における「御伽」の意味用法によつて名付けられた叢書名であることから、「室町時代の小説の汎称」としては適当ではないとし、「中世小説」という名称を用いている。

これに対して、藤井隆は江戸時代以前「御伽」が貴人の相手を意味する意で用いられたことを確認した上で、室町時代の日記から、これらの作品の享受に関わつたのが、貴族、僧侶、高級武家の貴人であつたこと、またその形態が元来は絵巻が中心であつたことも、それらの享受者を裏付けることから、「御伽草子の名称も決して不適當ではなく、むしろその本質をついているもの」とする。なお、室町期の貴人達にとつてこれらの作品は源氏物語等の文学作品とは異なる「慰み物」であることが日記資料から窺うことができ、近世中期以降「子女の慰み物」と変化したことは決して不当ではないと

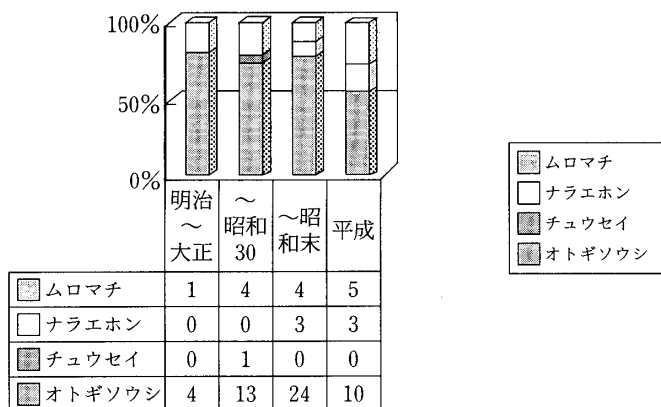
も述べる。⁽⁵⁾

この昭和三十年代の論以降、資料に基づいた正面からの名称に関する提言はないように思われる。が、「御伽」の本質が明らかにされ、多くの資料が発掘され個々の作品の実態が明らかになりつつある中、後述するように、これらの作品群をやはり「御伽草子」と呼んでもさしつかえないという意見も根強い。

その根強い意見を集約したのが美濃部重克である。⁽⁶⁾ これまで「御伽草子」という呼称、「物語」系統の呼称、「小説」系統の呼称の三種の呼称が、このジャンルのものとして採用されてきたことをまず述べ、さらにこれらの一ジャンルとしての範囲を決める十の特質をあげる。中でも享受の仕方の問題と密接に関わる「志向性」「表現の媒体とテキストのかたち」「環境と興趣」「享受の仕方」を重要な決定条件とする。その上で、「人と人が向き合つて徒然を慰めるのが「御伽」であり、その用に供されるに適したかたちをもつ草子がこのジャンルの特徴であるとするならば、「御伽草子」という呼称はその部面からの命名として相応しかろう」とする。ただ「その際、留意すべきは御伽草子という呼称は大別して御伽草子と認めることの出来る作品と、他のジャンルの作品の御伽草子的なかたちの両方を含み得るものであるという点である」とする。

右の美濃部氏の提言に深く同意しつつも、やはり名称選択に悩むことがある。それは、現在に至るまでの刊行されてきたこれらのジャンルの叢書の名称が一つの原因と考える。

そこで、現在まで世に出たお伽草子関連の叢書（専門的なもののみでなく一般向けのものも含む）に注目し、それらがどのような名



(一) 叢書の名称の分類

二 叢書の名称から見る用語の推移

称を付けられてきたかという実態を追ってみることにする。また、叢書の場合、その序や解説等で名称についてふれることが多いのも参考になると考えるからである。

名称についての現状を把握した上で、筆者なりに国語史の立場から、御伽草子の名称についての私見を述べてみたい。

明治以降今日に至るまでのこの種の叢書名について調べてみると、その頭の文字に注目して大別すれば次の四種に分けられる。

- (1) オトギゾウシ系……御伽草子・お伽草子・御伽草紙・御伽草子絵巻
 - (2) ムロマチ系……室町物語、室町時代物語、室町期物語、室町小説、室町短編など
 - (3) チュウセイ系……中世小説
 - (4) ナラエ系……奈良絵本、奈良絵巻
- 刊行時期を、明治・大正、昭和前半、昭和後半、平成の四期

間に便宜的に分けて、先の四類が叢書名で使われてきたおおかたの状況を示したのが、上のグラフである。

このグラフから、(1)のオトギゾウシ系がこの叢書の呼称の中心となることがわかるが、一方で、(2)のムロマチ系はその年代でも使用され続けてきたこともわかる。また、平成になってからは、(1)のオトギゾウシ系の占める比率が少なくなってきた。

(二) 明治・大正期の叢書名

まず、(1)のオトギゾウシ系呼称をいわゆる広義として使用した最初の叢書は、明治三十四年(一九〇二)の、荻野由之校注による『新編御伽草子』(誠之堂書店)である。それ以前の明治二十四年(一八九一)に出た今泉定助ほか校注『御伽草子』(吉川半七刊)は、荻野版二十三篇を対象としたものであった。荻野由之は「御伽草子は、短編の草子物語二十三種の惣名なり」と断った上で、その同類二十種二十編を収載して『新編御伽草子』として出版した。ただし、その序には、荻野が選集した作品というのではなく、おそらく「屋代輪池翁」の旧蔵本で、何人かが古草子を集め「新編御伽草子」と名付けたものを出版したとある。その書の由来はともあれ、結果的には広義の名称としての御伽草子を世に広めるきっかけとなった。

大正期には、大正七年(一九一八)、藤井紫影(藤井乙男)校注の『御伽草紙』(有朋堂文庫第37)が三十九種三十九編を収載し、大正十四年(一九二五)には、山崎麓校註の『校註日本文学体系第19お伽草子』(国民図書株式会社)が四十七種四十七編を収載、刊

行した。

この明治・大正期に、広義としての御伽草子について、その名称の是非を論ずるものはなかった。明治二十三年（一八九〇）、「小説史稿」で関根正直は「文正草子・梵天国・物草太郎などいふ例の御伽草子……当時代の御伽草子には、猿蟹合戦、桃太郎の話し、又花咲せ爺、兎の仇討、さては鼠の嫁入などいふものありき……」と述べている。が、これは、市古貞次が「御伽噺、童話の書といふくらの意味に広く解してゐるものやうである」（『中世小説の研究』）と述べているように、御伽草子を文学史の一ジャンルとしてとらえたものとは言えない。また、有朋堂文庫の緒言で藤井乙男は以下のように述べている。

「室町時代より江戸時代初期にかけて、婦幼の読物として述作せられし小説を概称して御伽草子といふ、この名称はいつ頃に始まりしか定かならねど、徳川氏の初期に御伽婢子、新おとぎ等の書名、多く行はれしより察するに、此類の小説をおしなべて御伽草子といひ習はししこと、猶徳川氏の中葉以後兒童の玩弄に供せし絵解本を、一般に赤本、草双紙など称へしと同様なりしなるべし。享保の頃にや、大阪の書肆渋川某が文正草子以下酒呑童子に至る二十三種を採り絵入横本として刊行せしより広く世に知られて、これに入りたるもののみ御伽草子と思へる人もあれど、こは只手あたり次第に採り集めしばかりにて、深き理由あるべくもあらず」

右の藤井や先にふれた荻野の言から、明治・大正期においては、「御伽草子」が渋川版二十三篇の呼称であったと意識しつつ、それらに類するものの呼称として差し支えないというのが一般的な見解

であったと思われる。

ただ、この時期には、『新編御伽草子』にやや遅れて、明治四十一年（一九〇八）、ムロマチ系の平出鏗二郎校注の『室町時代小説集』（精華書院）が世に出た。ただし、御伽草子の名称に対する疑義は記されてはいない。その緒言には「……その採る所も、近時刊行せられたる、お伽草子及び、新編御伽草子等に、漏れたるものを選びたり」とあるのみである。しかしながら、一部の作品についてはあるが、異本を同時に収載するこの叢書に、この分野における専門的な姿勢があることを見逃してはならない。このムロマチ系の流れは室町時代小説、室町時代物語、室町物語、室町期物語等、以後の時代にも生き続けることになる。平出は明治四十二年『近古小説解題』（大日本図書）において、鎌倉期から江戸初期の多くの物語草子を世に紹介、この分野の研究の貴重な資料を提供している。

(三) 昭和前半の叢書

続く昭和の前半は、この広義のオトギゾウシが広まった時代でもある一方、それ以外の呼称が脚光を浴びた時代でもあった。

昭和初期には、昭和二年（一九二七）、関根正直『新選お伽草子』（新型袖珍名著文庫第11）（富山房）、昭和五年（一九三〇）、内海弘蔵校注『新釈日本文学叢書第二輯第七巻 御伽草子集』（日本文学叢書刊行会）がある。後者は四十六種四十六編を収載した叢書であるが、その校註者である内海は解説で次のように述べている。

「……この絵詞が次第に発達して、短編の物語となって来た。即ち従来絵画を主として、文章は其の附属物であったものが、主客転

倒して、茲に独立の物語となって現はれたものである。これが室町時代の短編小説で、世に御伽草子というものである」

昭和十年代には、昭和十一年（一九三六）、島津久基『お伽草子』（岩波文庫）、昭和十三年（一九三八）には島津久基『お伽草子』（至文堂）、木村嘉雄、野田修一『御伽草子』（雄山閣文庫）、藤村作訳『お伽草子へ物語日本文学・第二期第八巻』（至文堂）が刊行された。

岩波文庫の解説で島津は次のように述べている。

「御伽草子の名義は、普通、狭義には文正草子・鉢かづき以下二十三編の各同体裁絵入横板本の叢書——乃至その各編に与へられてゐるが、更に広義にはこれに准ずる同類の作品にまで拡大して、それらの汎称としても用ゐられる。即ち主として室町時代から江戸時代初世へかけて行はれた通俗短編小説の一群が包括される便宜的な称呼で、その名の示す如く、——但し何時頃からこの称呼が用ゐ初められたか詳らかでない。——婦幼童蒙の読み物であり慰めであり同時に教へでもあつた。総じて童話的であるが、純童話は寧ろ少い。所詮知識的には小児である大衆成人に飲ばれたものであらう」

島津は、昭和初期にはオトギゾウシではなく「近古小説」という名称を使っていた（『近古小説選』中興館、昭和二年・『近古小説新纂初輯』中興館、昭和三年）が、昭和六年（一九三一）十月、「御伽草子論考」（『国語と国文学』10月号）において、荻野・藤井の説をほぼ継承して「御伽草子を室町時代の小説の汎称とする事は決して不当ではない」とした。その根拠は、そもそも二十三編を御伽草子と呼んだこと自体が偶然で、その二十三編が享受された時代は本

来室町時代であり、江戸時代からすでに二十三編以外についても御伽草子と呼んでいたという事実によつてゐる。室町時代の小説の汎称としてのオトギゾウシは、これ以降ほぼ一般的通称としての道を歩むことになる。

一方、昭和十年代には、ムロマチ系呼称の叢書も出てゐる。昭和十年（一九三五）刊の笹野堅『室町時代短編集』（栗田書店）、昭和十二年から十五年（一九三七—一九四〇）刊行の、横山重・太田武夫編『室町時代物語集第一〜四』（大岡山書店）、昭和十八年（一九四三）刊の横山重『室町時代小説集』（昭南書房）である。

笹野堅は、『室町時代短編集』の巻頭に掲載した論文「御伽草子攷」において、洪川版二十三編が横型奈良絵本の体裁によつてゐることを指摘し「御伽草子とは奈良絵本で行はれたものを属せしむべき名称であつたと思ふのである」と外形を重んじた新しい説を展開した。しかし、名称そのものについては御伽草子を使用し、同書中には「御伽草子すなはち室町時代の短編小説」とある。

それに対して、横山重、太田武夫は本地物語の資料蒐集成果から生まれ出た右の『室町時代物語集』の中で「室町時代物語集のみに就いていへば、最初は多く神道集に出てゐるものを取り、次に一般の本地物語に及び、更に幸若舞の本や、お伽草子類に及びたいと考へる」とあり、室町時代物語＝御伽草子という考えではないことが推測される。名称そのものについて特に言及はないが、広義の御伽草子が通称として一般的になりつつある中でこの姿勢は貫かれ、その後引き継がれていく。また、この叢書が明治期の平出の姿勢を受け継ぎ、多くの異本を掲載している点も、通称オトギゾウシに対

する専門的なムロマチ系呼称を思わせる。

さて、戦後しばらく叢書の類は見られないが、昭和三十年前後から、続々と叢書が刊行された。昭和二十八年（一九五三）に島津久基・市古貞次校注の『続お伽草子』（岩波文庫）、斎藤清衛『要註御伽草子名作選』（武蔵野書院）、昭和三十二年（一九五七）に高木卓『少年少女のための国民文学6 お伽草子』（福村書店）、昭和三十三年（一九五八）に市古貞次校注『日本古典文学大系第38 御伽草子』（岩波書店）、昭和三十五年（一九六〇）に『縮冊日本文学全集第二卷 中世古典篇』（日本週報社）、昭和三十六年（一九六一）に福永武彦他訳『古典日本文学全集第18 宇治拾遺物語・お伽草子』（筑摩書房）等と続く。一般や少年少女のための口語訳を付したものが出ているのは、このオトギゾウシ系のみの特徴であり、それだけこの名称が通称化していることを意味しよう。

これらの中で、市古による「御伽草子」というタイトルの岩波古典文学大系が出たことは名称そのものにも大きな影響を与えた。市古は昭和二十年代より、新資料の発掘成果を古典文庫によって刊行し続け、昭和三十年（一九五五）『中世小説の研究』（東京大学出版会）を世に出した。その序説で、「伽」の意味と名称「御伽草子」についてその変遷をたどり考証した結果、名称「御伽草子」は「室町小説を蔽ふに足らぬ」という結論を下し、「中世小説」の名称を用いている。その市古が、本書より後に刊行された、二十三編以外の作品も収載した岩波古典大系のタイトルを「御伽草子」にしたのは、すでにこの時期通称「御伽草子」が一般にまで浸透していた先のような状況からかと想像される。大系の解説で次のように述べて

いる。

「……御伽草子には、このように広狭二義があり、これが現在も並んで行われているようである。本書では、そこでまず狭義の御伽草子である前掲二十三篇を、御伽草子板本によって収め、さらにそれ以外の注目すべき作品として、福富長者物語、あきみち、熊野の御本地のさうし、三人法師、秋夜長物語の五篇を付載することにした」

右には広義の「御伽草子」を積極的に認めるという姿勢は感じられないにもかかわらず、この書のタイトルは世に多大な影響を与えた。

しかしながら、一般に通称が浸透している一方で、この時期は市古をはじめとした研究者による新資料紹介が盛んな時期であり、これらの名称は同じ類の作品を扱いながらも個々の研究者によってまちまちであるという状況であった。たとえば、古典文庫からは、市古が昭和二十二年（一九四七）～三十一年（一九五六）にかけて『未刊中世小説 第一～四』（古典文庫12・18・53・110冊）を、横山重・太田武夫が、昭和二十九年（一九五四）から四十一年（一九六六）にかけて『室町時代物語第一～七』（古典文庫86・93・117・158・172・202・233冊）を、また、未刊国文資料研究会からは、藤井隆が昭和三十一年（一九五六）～三十七年（一九六七）『未刊御伽草子集と研究 未刊国文資料第一～四』（第一期第2・5冊、第二期第6・11冊）を、重なる時期に刊行した。どれも名称そのものについては言及していないが、新資料を多く世に出した上で、その名称を一般に問う姿勢が感じられるのではなからうか。なお、叢書に関し

ては「中世小説」の名称を用いたものは、右の『未刊中世小説』のみである。

四 昭和後半の叢書

昭和四十年代以降、昭和が終わるまでは、昭和前半以上に叢書が多数刊行される。その多くは言うまでもなくオトギソウシ系叢書である。その特徴は、一般の読み物として、あるいは少年少女対象の古典文学鑑賞として、口語訳の叢書が多く世に出て、そのタイトルすべてに通称オトギソウシが使われたことと、専門的な叢書ではオトギソウシの名称を「一応」「とりあえず」用いると断っているものが多いことである。

まず、一般向け読み物として、昭和四十年（一九六五）北畠八穂編著『御伽草子（古典文学全集31）』（ポプラ社）、四十四年（一九六九）に臼井吉見『日本短篇文学全集 第三巻 今昔物語・宇治拾遺物語・御伽草子』（筑摩書房）、五十四年（一九七九）に大岡信著『鬼と姫君物語 お伽草子』（平凡社名作文庫）、六十一年（一九八六）に『特選日本の古典 別巻二 お伽草子』（世界文化社）が刊行され、また、少年向けとして、昭和四十一年（一九六六）に川端康成『少年少女世界の名作文学45（日本編1）御伽草子』（小学館）、四十五年（一九七〇）に『少年少女世界の文学26（日本1）十訓抄・御伽草子・今昔物語・宇治拾遺物語』（小学館）、四十七年（一九七二）に池田浩彰『少年少女世界の名作64御伽草子』（小学館）、四十九年（一九七四）に福田清人作『お伽草子（ジュニア版・日本の古典文学11）』（偕成社）、五十一年（一九七六）に『ジ

ュニア版・古典文学10御伽草子』（ポプラ社）、昭和五十八年（一九八三）に原田千代子画『御伽草子（コミグラフィック日本の古典）』（暁教育図書）が刊行された。

専門的な叢書としては、昭和四十七年（一九七二）に市古貞次『御伽草子』（三弥井書店）、四十八年（一九七三）に白田甚五郎・岡田啓助・藤島秀隆『御伽草子』（桜楓社）、四十九年（一九七四）に東洋文庫監修・日本古典文学会編集『岩崎文庫貴重本叢刊 近世編 第一巻 幸若舞曲・御伽草子』（貴重本刊行会）、四十九年（一九七四）に大島建彦校注『日本古典文学全集36 御伽草子集』（小学館）、五十二年（一九七七）に西沢正二『お伽草子 およしの尼・玉もの前』（影印校注古典叢書（新典社）、五十三年（一九七八）に西沢正二『名篇御伽草子』（笠間選書92）、五十五年（一九八〇）に市古貞次『御伽草子』（利根出版）、同年に松本隆信『御伽草子集』（新潮日本古典集成）、五十六年（一九八一）にエヴァ・クラフト『お伽草子絵巻集と研究』（未刊国文資料第四期第10冊）、五十七年（一九八二）に奥平英雄『御伽草子絵巻』（角川書店）、五十八年（一九八三）に大島建彦校注訳『完訳日本の古典第49巻 御伽草子集』（小学館）、六十年（一九八五）に市古貞次『御伽草子上』（岩波文庫）、六十一年（一九八六）に沢井耐三『お伽草子（日本の文学38）』（ほるぷ出版）、六十三年（一九八八）に藤井隆『御伽草子新集』（和泉書院）が刊行された。

右の中で、市古の関わる二書は狭義の御伽草子、すなわち渋川版二十三編（東大国文学研究室蔵）であるが、これらを除けば渋川版以外の作品をも収載した、いわゆる広義の御伽草子としての名称で

ある。この時期、その名称についてふれることが多く「広義」とか「ひろく」とか付すことが多く、「通称によった」等の断りがあるものが目立つ。たとえば、松本隆信は「学術用語としての定義、その範囲については、いまだに定説が確立しているとは言えないのが現状である。筆者も、御伽草子を二十三篇以外に広げることには異存はないが、室町時代を中心とする物語作品を覆うに適切な名称であるかどうかには疑問を感じている」としながらも、ここでは「今日の一般的な使い方に従っておくこととした」（『新潮日本古典集成御伽草子集』）と述べる。

一方、藤井隆のように積極的に名称としてふさわしいとする意見もある。「御伽草子は吉野時代から室町時代初期に絵巻物文学として成立し、室町時代に展開して、江戸時代初期に至って、近世小説の中に姿を消し去ったところの、肩の凝らない娯楽的小説を中心とした小説群の総称である。御伽草子の名称が江戸時代に出版された、所謂、御伽草子二十三種の叢書名として登場したものであるため、この名称を否とする人もあるが、「御伽」の語は貴人の御相手の意として中世初頭から使用されており、作者の大部分は貴族、僧侶、官人などで、読者も本地物、縁起物以外の、多くは貴族、僧侶、官人、上流武家、及びその家族の娯楽のためであったと考えられるから、御伽草子の名称は相応しいとすべきである」（『御伽草子新集』和泉書院、昭和六十三年）

この時期、一般的な呼称はともかく、専門的に室町時代の物語草子をすべてオトギゾウシと呼んでいいのかという議論が再浮上しているのとみてよい。その背景には膨大な新資料の紹介によって室町時

代の物語草子の世界が広がってきた状況がある。

この時期、その流れに大きな影響を与えたひとつとして、横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第一〜十三、補遺二』（角川書店）があげられる。ムロマチ系の呼称を持つ叢書であり、現在の最大のテキストである。収載範囲は、成立時期、内容、伝本すべてにわたり従来のテキストより広く、室町時代の物語草子の全体像をとらえようとするものである。その序に、昭和前半の『室町物語集』の延長を以て成立したとあるが、オトギゾウシの名称について言及はない。

その編者の一人である松本隆信は、先にもあげた『新潮日本古典集成』の解題で、オトギゾウシの名称そのものを否定するのではなく、その多くが絵本形態を取っていたことが重要であることを説き、そのような形態を伴わない作品をオトギゾウシと呼ぶことに問題があると述べている。

昭和後半、右の『大成』以外にムロマチ系の呼称を持つ叢書は、昭和四十二年（一九六七）と昭和六十年（一九八五）に美濃部重克・田中文雅編『室町期物語1・2』（伝承文学資料集第2・12輯）（伝承文学研究会・三弥井書店）、昭和四十五〜四十八年（一九七〇〜一九七三）に松本隆信編『室町物語集成第一〜五輯』（汲古書院）がある。共に名称について言及はないが、専門書として編まれた叢書である。

なお、この時期には「奈良絵本」の呼称を用いる叢書が出てくる。昭和四十七年（一九七二）と昭和五十六年（一九八一）に岡見正男ほか編『古奈良絵本集（一）・（二）』（八木書店）、昭和五十六年

(二九八一)に奈良絵本国際研究会編『在外奈良絵本』(角川書店)が刊行された。実は同時期に先に掲げた「オトギゾウシ絵巻」とする叢書が出ている点もこれと関わる。この分野の多くの作品が絵と緊密な関係を持つことが重要視されてきた研究成果の表れである。奈良絵本はその外形に関する呼び名で、オトギゾウシと呼ぶか否かといった問題とは別の次元での呼称である。現存する奈良絵本の中には、平安期の物語などを扱ったものもあり、奈良絵本Ⅱオトギゾウシまたはムロマチとは言えないが、その多くが室町の物語草子を扱っている。

(五) 平成の叢書の呼称

さて、その前兆はすでに昭和後期に見られたが、オトギゾウシ系優位の流れが確実に変わり始めたのが平成になってからである(昭和六十四年刊行は便宜的にこの時期に含めてある)。

オトギゾウシ系は、平成元年(一九八九)に中村幸彦・日野龍夫『新編稀書複製会叢書第一〜四巻 御伽草子・仮名草子・浮世草子・咄本』(臨川書店)、同三年(一九九二)に福永武彦他訳『お伽草子』(ちくま文庫)、同じ年に市古貞次校注『御伽草子』(岩波書店)、同五年(一九九三)に晃月秋実『お伽草子』(くもんのまんが古典文学館)、同八年(一九九六)に須永朝彦『日本古典文学幻想コレクション2 伝綺』(国書刊行会)、同じ年に大阪青山短期大学国文科編『御伽草子集』(大阪青山短期大学所蔵本テキストシリーズ1)、同九年に(一九九七)やまだ紫『御伽草子(マンガ日本の古典21)』(中央公論社)、同十年(一九九八)に二反長半他『御伽

草子(はじめてであう日本の古典11)』(小峰書店)、同十二年(二〇〇〇)に沢井耐三『お伽草子(古典名作リーディング2)』(貴重本刊行会13)、同十四年(二〇〇二)に西本鶏介他『御伽草子(21世紀によむ日本の古典)』(ポプラ社)がある。

ムロマチ系は平成元年(一九八九)と四年(一九九二)に市古貞次他校注『室町物語集 上・下(新日本古典文学大系)』(岩波書店)、平成元年(一九八九)に濱中修『室町物語集新註(大学古典叢書8)』(勉誠社)、平成二年(一九九〇)に日本古典文学会編『室町物語集(日本古典文学影印叢刊27)』(日本古典文学会)、平成十二〜十五年(二〇〇〇〜二〇〇三)に京都大学文学部国語学国文学研究室編『むろまちものがたり第1〜12巻』(臨川書店)、平成十四年(二〇〇二)に大島建彦・渡浩一校注訳『室町物語草子集(新編日本古典文学全集63)』(小学館)がある。

なお、ナラエ系はこの期も引き続き出版され、平成七年(一九九五)に小杉恵子・ジャクリーヌ・ピジョー『奈良絵本集』(古典文学庫第582冊)、同九・十年(一九九七・一九九八)に工藤早弓『奈良絵本上・下(京都書院アーツコレクション)』(京都書院)、同十四年(二〇〇二)に糸井通浩責任編集『奈良絵本 上(龍谷大学善本叢書)』(思文閣出版)がある。

一般読み物として、あるいは少年向け古典入門書としては相変わらずオトギゾウシが続くが、専門的な叢書の多くはムロマチ系を取っている。

岩波書店の古典文学大系の新シリーズおよび小学館の古典文学全集の新シリーズが、共に旧シリーズのオトギゾウシ系を改めムロマ

チ系の名称を取っていることは、今後この名称選択に大きな影響を与えるのではなからうか。新古典文学大系『室町物語上・下』の校注者の一人である市古貞次は次のように述べている。

「この見解（＝御伽草子を室町時代の短編小説の汎称とすること）が以後の学界ではほぼ認められて、最近にまで及んでいるが、その間にも室町時代小説の汎称とすることに疑念を持つ研究者も少なくなく、室町時代小説、室町時代物語、あるいは中世小説とよぶことも行われていた。ごく最近では、「御伽草子」を狭義に解し、二十三篇に限定する考えが再び強くなっているように思われる。本書では、二十三篇以外の作品を収めたこともあって、室町物語と名づけることにしたが、御伽草子の名の所以である御伽性が、室町物語の中核をなすものであることには変りがない」（『室町物語上』解説）。

新編日本古典文学全集の『室町物語草子集』でも、その校注者の一人である大島建彦は以下の通り御伽草子の呼称を穏当としながらも、学術用語としては室町物語の方が適切と明確に述べている。

「室町時代の物語草子の類が、一般に御伽草子という名で呼ばれるのは、まったく偶然の命名にすぎないとしても、その内容や形態からいって、ほぼ穏当な術語であったように思われる。それに対して、最近の研究者の間では、むしろ室町物語という名称が、しだいに多く用いられるようになっており、現段階の学術用語としては、もっとも適切のものであるといえよう。本書における室町物語草子という名称も、おもに室町時代に成立した物語であって、おおむね草子の形態で伝えられたものをさしている」（『室町物語草子集』解説）。

右の二書以外に、ムロマチ系叢書の編者、濱中修も「室町物語即ち広義の御伽草子は鎌倉期の擬古物語を承けて、室町期を中心に、南北朝から江戸初期までの永きにわたって作られ続けて来た短編小説である……この名称はこのジャンルの作品の祝儀性やロマン的性格をよく表しており、故に江戸期の一書肆が便宜的に付けた名称であるにも拘わらず今日でも広く行われている。しかし、御伽草子の名称は「御伽噺」の意に引き寄せて理解され易いという欠点を持っている。室町期の物語文学には御伽草子の名に相応しい作品も多いが、そうでないものもある。例えば、本地物を御伽草子の名で一括したのでは、その宗教性が薄れることになろう。つまり御伽草子の名称では、この作品群が持つ広がりや多面性が抜け落ちてしまうきらいがあるのである。故に本書では仮に「室町物語」の名称を用いて、この作品ジャンルの時代性と社会的雰囲気や籠めようとした。ただ、御伽草子の名にも捨て難いものがあり、結局はこの作品群を語るその場面に応じて用語を使い分けるのが、現状では妥当ということになろう」（『室町物語集新註』解説）。

一般読み物向けとして、平成十二年（二〇〇〇）に『お伽草子（古典名作リーディング②）』（貴重本刊行会）を刊行した沢井耐三も「お伽草子」という名称についていえば、「お伽」の語こそ古くから各所で用いられてはいたが、室町時代の短編類をさす「お伽草子」という語は、これまでなかったようである。お伽草子の名称は、右のように江戸時代の一書店が童幼向けの一叢書に付したものであったが、この命名を契機にその名がしだいに熟し、やがて明治・大正に至ると、洪川版二十三編以外の、同類の物語類にも拡大

して使用されることとなった。ただ、こういった命名の仕方は、室町時代の物語がすべて子供向けであつたわけでもないし、ときには桃太郎や猿蟹合戦のような昔話までも含みかねない曖昧さはらんでゐるため、お伽草子の名を排して、学問的により厳密な、近古小説、中世小説、室町時代物語などの名称を用いることも行われてゐる。本書の書名は通称のお伽草子によつた」と述べてゐる。

膨大な資料発掘および研究成果から、室町の物語草子をそっくりそのまま広義のオトギゾウシとする流れは専門分野の世界ではひとまず幕を閉じ、オトギゾウシを波川版二十三編以外に広げること自体を否定するのではなく、ある程度の範囲を以てオトギゾウシとするというのが、現在の専門分野における大方の理解と考えてよいと思われる。

三 用語「御伽草子」の問題点

この「御伽草子」の名称が、なぜ室町の短編小説群の名称として問題なのかという背景には、一つには本来は江戸時代の叢書名「御伽草子」であるという問題、もう一つにはオトギという語の意味の問題がある。ただ、前者は、呼称を用いた時代のオトギの意味と関連することから、問題点を「オトギという語の意味」に集約できよう。

現代の日本において、トギという語を単独で用いることは、ある地方の方言を除いてはまずない。しかしながら、現代でもトギという語はオを付すことによつてオトギとしてなら用ゐる。最も一般的な意味は「オトギばなし」であり、子どもに聞かせて楽しませるた

めの、空想をまじえた話の意であろう。「オトギの国」と言えば、そういう話に出てくる鬼や妖精など人間以外の動物が棲む国という意味である。柳田國男は、このオトギ子どもという発想が、昭和のはじめ頃には彼の世代にはなかつたと嘆いてゐるが、それはまたすでにその時代にオトギ子どもという発想がすでに世にまん延していたことを意味しよう。

すでに、明治二十五年（一八九二）に巖谷小波『新御伽草子』が博文館より出版されている。これは江戸の叢書「御伽草子」やそれを広げた古き世の物語草子とは異なつた、新たな児童文学作品である。もちろん「新」とある以上、江戸の叢書「御伽草子」またはそれらを広げた「御伽草子」を意識したものであろうが、子どものためのオトギバナシが定着する一端を担つたのではなからうか。ほぼ同時期の坪内逍遙『小説神髓』（一八八五）には「童蒙のお伽話」という語もうかがえる。

この「御伽」が江戸の叢書「御伽草子」として用いられる以前、どういふ意味であつたかを明らかにしようとしたのが桑田忠親であつた。⁽¹²⁾桑田によればオトギとはトギの敬語であり、貴人のお相手をすることであつた。戦国時代から江戸初期にかけては「御伽衆」という職制があり、オトギの対象は主君である大名であつたことを歴史資料から説き明かしている。桑田説は、その資料対象を戦国武将に限定した点において問題があつたとは言え、オトギの対象が決して婦女童幼ではなかつたことを明らかにした点で大きな意味がある。

オトギ子どもという連想が起つてきたのは、市古貞次によ

れば江戸時代中ごろのことらしい。江戸初期から中期にかけて「御伽」という文字を冠した草子類が数多く出版されているが、この「御伽」はむしろ内容的には「御伽衆」の話に近く、決して子供に對する読み物という意味ではなかった。一方、天下泰平の世を迎え、大名に仕える御伽の対象も主君から若君へと推移し、その必然的な変遷に応じて、御伽ということばが、大人のための御伽の話から離れて、婦女童幼に對して用いられるようになったのは「近世も中ごろ」ではないかとする。そして、その頃世に現れたのが叢書「御伽草子」であったという。叢書「御伽草子」(通称渋川版)は嫁入り本ともいわれ、その購買対象は書籍広告等から婦女であったと言われる。

ともあれ、現代のオトギとは異なる意味がオトギにはあった。そのオトギの意義については様々な論がある。

ここでは、トギという語を国語史の立場から、主に古辞書の記述により追っていきながら、先学の説を検討してみたい。

四 トギの原義に関する説

トギの原義に関しては諸説ある。主なものを三つあげる。

- (1) 院政期の『観智院類聚名義抄』の「對」(以下「対」と記す)にある和訓「トグ」の連用形という説。
 - (2) 民俗語彙を根拠に、連れ、相手などを意味するとする説。
 - (3) 「解く(あるいは説く)」の連用形、濁音化説。
- その他、折口信夫の、漢字「伽」の *gā* という音が闇の魔物を追い払うところからくるという説⁽¹⁴⁾もあり、「伽」用字論としては興

味深い、「伽」の字がトギに宛てられたのは後世のことであるの無理がある。

- (1)は、山田俊雄の指摘による⁽¹⁵⁾。「相手に向かい合う」という意味の「対」という文字を書く「トグ」(『観智院本類聚名義抄』法下一四四)からトギがきているとする説であるが、現行の国語辞典では多くこの説を採用している⁽¹⁶⁾。動詞「トグ」の文献での用例が未発見である点に弱点があるが、市古の蒐集した鎌倉時代以降の文献に見られるトギの用例の意味とも合理的につながる説である。ただ、(3)説を提唱する角川源義は、この『名義抄』の「対」のトグ、コタフ、ムカフといった和訓は、「トギの本来の意味から、トギといふ行事の流行にもなって派生されたもの」と考える⁽¹⁷⁾。

(2)はたとえば野村純一の民俗語彙調査がある⁽¹⁸⁾。古くは柳田國男が当時上方を中心に「相手」等の意味で使われていることを指摘し、そのトギの語源を「同志」の意味のドシもしくは「思ふどち」のドチかと述べている⁽¹⁹⁾が、野村の、民俗語彙としてのトギには単なる仲間、連れではなく、親戚以上の交わりを持つ相手という意が残っているという調査報告は、やはり(1)と同じく鎌倉時代以降の文献に見られるトギの用法と合理的につながる説である。

(2)は、たとえば荒木良雄の「口説き、絵説き」の「説き」を「とぎ」の語源ではないかとする説⁽²⁰⁾、あるいは角川源義の「夢解、絵解のトキ」にトギの語源があるとする説⁽²¹⁾である。「解説する」意味でのトキの転化とする荒木説、喜界島の巫女をトキといい、絵解も本来は社寺の縁起や物語を人々に語りあかす聖職であったということから、「解説する」意をさらに遡ってとらえ唱道(者)としてのト

キととらえる角川説であるが、ともに「解くまたは説く」という動詞の連用形の濁音化（もしくは動詞語尾の濁音化の連用形）ととらえている点で共通している。なお、『大言海』では「説き聞き」を語源とするが、これも(3)の類に準ずる。

ここで(3)が(1)と(2)と決定的に異なるのは、言語行為と直結する点である。

御伽のトギは鎌倉時代以降の文献に登場する。『日本国語大辞典第二版』には『宝物集』（九冊本）の例を筆頭にあげるが、市古貞次はこの部分が増補の可能性もあるということから次の『無名草子』の例を最も早い例としてあげる。⁽²³⁾

こよひは御とぎしてやがてゐあかさん、月もめづらし（無名草子）

市古は、以下江戸初期までの八十数例を検討した結果、その意味の本義は「ある人と共にあること、相手をする事、相手という意味」であるとする。そして、これは(1)と(2)とも関わってくる。

さらに、市古は「とぎ」を受ける者は、所在ない、心さびしい、つれづれな状態」であることを指摘し、「そうして、つれづれを慰め、相手をするには、種々の方法が考えられるであろうが、最も多いのは、いうまでもなく言語によるものであった」とする。ここで初めて、言語行為とする(3)説のトギと関わりの可能性が示唆される。角川源義は「絵解き」等の関連から、これらの例の中で言語行為の方を重要視する。

一方、言語行為としてのトギについては松田修が疑問を提示する。⁽²⁴⁾ すなわち、市古のあげた用例を再検討した上で、トギとは

「人が人の相手をする」ことであり、「話」という要素は、非常に希薄であるとする。そして、「伽が、ある限られた時間のものではなく……生活の流れにおける、深い相似関係を意味することはある」とし、「それを図式化すればA（伽されるもの）⇌A（伽するもの）」ということになり、このA⇌Aの関係において、伽の原義なり、性格なりを見定めることができるのではないかとするのである。これは松田自身が指摘するように『多聞院日記』において「伽」を「似吾」と書くこともあったという記述と関わってくる。この松田の見解は(2)の民俗語彙としてのトギが、単なる相手や友人ではなく親戚以上の交わりをする相手であるという意味を持つ点とより深く関連してくる。

以上のことから、本来の「トギ」の中心を言語に置くか否かによって、(1)(2)は(3)とのつながりを持つかが決まってくるかもしれない。この点を国語史の立場から、古辞書の記述を中心に再検討してみることにする。

五 漢字「伽」とトギ

まず確認しておきたいことは、トギに漢字「伽」を当てるのは我が国の用字であって、漢字「伽」に本来トギにかかわる意味はないという点である。その当て字がいつから行われたかについては、未だに指摘はないが、古文書の用字や古辞書の記述から、おそらく室町時代まで下るのではないかと思われる。これについては後述する。

トギの訓が「伽」と結びつく以前、漢字「伽」自体は、奈良、平

安時代の文書にもしばしば見られる。⁽²⁵⁾「伽藍」「闕伽井」「闕伽器」「闕伽棚」「闕伽折敷」「楞伽(経)」や仏語「瑜伽」「伽陀」「僧伽」「薄伽梵」等を拾い出すことができる。『新撰字鏡』や『和名類從抄』にも「伽藍」の熟語が見いだせる。ただ、これらの漢字使用が「トギ」と結びつくような用字はない。

まず、古辞書で最も注目すべきは、先にも揚げた山田俊雄の指摘する『観智院本類聚名義抄』の「トグ」の和訓を付した「対」の記述⁽²⁶⁾であろう。

対 都内反 トグ コタフ ムカフ タグヒ カサヌ衣 カタ
キ アタル オモフ アフ 禾タイ (法下一四四)

「トギ」と直接結びつく「トグ」があり、言語行為と結びつく「コタフ」、仲間と結びつく「タグヒ」がある。ここには漢字「伽」と結びつく以前の「トギ」の意味拡大の可能性が記されているといつてよい。

『観智院本類聚名義抄』には「伽」の文字は別にあり、「ヨル ユタカニ」(仏上七) という和訓が記されているが、「トギ」の和訓はない。ただ、この「ヨル」が『日本国語大辞典』の補注で解説するような「寄り添う」意の「よる」であるならば、「伽」は「人が加わる」というような解釈がすでになされていたことを意味しようか。なお、この和訓は室町前期頃の音義書(『法華経音義』)まで引き継がれるが、室町時代を代表する古辞書『和玉篇』『節用集』には引き継がれることはなかった。

一方、『字鏡集』⁽²⁷⁾では寛元本(七巻本)には「伽」の和訓が見えないが、同じく七巻本の龍谷大学蔵本や二十巻本(白河本・尊経閣

本)では「ユタカ、ノリ、カシコシ、サキラ、ヨル」の和訓を付す。この時点でも「伽」とトギは直結しない。ただ「伽」を弁舌の意を表す「サキラ」と訓じている点に注意したい。すなわち、『名義抄』が『字鏡集』に先行するという了解のもとで考えれば「伽」という漢字については、「ヨル」とまず訓じられてからその後、積極的な言語行為を表す「サキラ」という訓が加わったことになる。また仏法を意味する「ノリ」が加わっている点も注目すべきである。なお、先にあげた『字鏡集』には「対」について「トク」という和訓が付されている。

さて、トギが文献に実際に現れるのは先に触れたように鎌倉時代であるが、鎌倉時代の用例は仮名書きである。市古のあげている鎌倉時代の文献の用例中に「御伽」と漢字表記のものがあるが、これは江戸期の伝本によっているためである。管見ではこの時期のものとして『延慶本平家物語』の次の二例を見出す、これもまた仮名書きである。

兵衛佐ハ榎ニ被立タリケルガ、景廉ガ来ヲ見給テ、「折節シ神妙ナリ。頼朝ガトギニ候ベシ」ト被置タリ。(第二末)

三位中将重テ宣ケルハ、「少キ者共ヲ留置ガオボツカナキゾ。誰ハグ、ミ、誰哀ミスラムト思ラムトテ、打ステ、ラクガ悲シサニ、多ノ者ノ有ル中ニ、汝等ガ志ノ有ガタケレバ、我身ヲワクルガ如ニ思テ、少者共ノトギトモナレト思テコソ云ニ、カヤウニコソ口惜ケレ」トウラミ給ヘバ(第三末)

鎌倉期の古記録、古文書にもトギとしての「伽」は見出せない。⁽²⁸⁾以上のことから、鎌倉時代において、まだトギと漢字「伽」は結

びついていなかったと考えたい。

さて、室町時代の古辞書に至って、初めて「伽」に和訓トギが付される。

『和玉篇』（慶長十五年版）において、「伽」に「ノリ、カシコシ、トギ、シナウ」の和訓を付す。但し、室町中期写の『篇目次第』⁽²⁹⁾をはじめとして、「トギ」の和訓を付さない伝本も少なくない。なお、北恭昭の『和玉篇五本和訓集成』によれば、先の慶長十五年版以外には、「玉篇略」「米澤本」に「トキ、シナウ」の訓が見える。

古本系『節用集』では、饅頭屋本、黒本本にトギと和訓があり、黒本本には「人之伽」なる用例がある。文明本では「伽」に「トギ、ヒジリ」という訓を付し、別の箇所では「談助」に「雑談の伽也」という説明を加える。印度本系諸本では「伽」に「トギ、シナウ」という訓を付し「人ノ伽」という用例を記す。なお、近世の節用集になると『書言字考節用集』『節用集大全』『和漢通用集』等では「伽」に「トギ」以外の和訓は見えない。ちなみに『書言字考節用集』には「本朝左右ニ陪從シテ語ヲ交ル者ヲ一（ト伽）ト曰フ故ニ所見俗人此ノ字ヲ用フ」（訓読、注記、下線は筆者）とある。この記述はいわゆる御伽衆を意味するが、傍線部からこの用字に対する意識がうかがわれる。

『温故知新書』（文明十六年（一四八四））には、「伽 トキ 人 伴」とある。

なお、『和玉篇』や『節用集』と並んでこの時期の重要な国語辞書『下学集』（文安元年（一四四四））には「トギ」と訓ずる「伽」はない。

以上のことから、『和玉篇』が成立したとされる室町前期には「トギ」に「伽」を宛てていたとしたところであるが、その和訓の見られる『和玉篇』の伝本の書写時代が降るのがやはり気になるところである。古本系の節用集の諸本では採用されていることを考えると、節用集成立時期と推定される『下学集』以降、すなわち室町後期に近い頃だったのではなからうか。

一方、室町時代の日記、文書においても「トギ」の意味での漢字表記「伽」は室町後期からのように思われる。それまでは『教言卿日記』のように必要があれば仮名書きを使用していたのではないか。

一、新御所二左京亮夜二御トギニ祇候之処、違例之間退出了、仍無人云々。而教豊教高各夜番二可祇候之由裏松被意見可然云々。（応永十五年六月十七日条）

天文頃からの記録資料からはトギの意味の漢字「伽」が少なからず拾える。ただ、武家文書に多く、公家日記ではむしろ仮名書きする。これは、先の『書言字考節用集』にあるような「伽」の俗字意識が当時すでにあったことを表すのかもしれない。

もう一つ、室町末期の記録資料から得られる用例にある種の偏りがあることに注意しなければならない。月待ちや庚申講などの宗教行為と関わるトギが多い点と、御伽衆に関わるトギが多いことである。これは記録という資料の性格上、時代的な背景との関わりからこのようなトギが多く拾えるのであって、鎌倉時代以降の「人が人の相手をする」というトギが変質したわけではない。市古のあげる用例中、お伽草子や狂言台本のトギの用法は従来の意味用法を受け

継いでいる。ただ、上記のようなトギが用いられるに至った背景には、従来のトギの持つ意味の拡大というより、トギと結びつく以前、漢字「伽」に考えられていた意味（正確に言えば付された和訓）が関与しているのではなからうか。

以上のことから、トギの原義は、やはり『名義抄』の「対」の付訓「トグ」と関連すると考える。その意味に言語行為や宗教的行為が加わったのは、トギが漢字「伽」に結びつく以前（鎌倉時代と考える）に「伽」なる漢字に言語行為や宗教的行為に関わる意味があったことと関係すると思われる。すなわち、先に述べたトギの原義についての説で言えば、(1)(2)がまずあって、漢字「伽」と結びついた時点で(3)の要素が加わったとみてよいのではないか。

これによって、先学によって引かれることの多い『多聞院日記』の次の記述の解釈も可能である。

伽トキ人の徒然ナントノ時ノトキ也一説には似吾如此書ト申説
アリ可尋之（永禄十一年正月二十日条）

まず「伽」の字に解説を与えていること。それは、室町末期のこの時点でも「伽」トギと単純に結びつくほど一般化していなかったということである。この点からも、「トギ」の漢字表記「伽」はこの記述をあまり遡らない室町後期としたい所以である。そして、トギが漢字「伽」と結びつく以前、「似吾」〔多聞院日記〕の別の箇所では「似我」ともある）のような当て字が存在していたのであろう（但し、他の文献からは現時点では見出せない）。その意味は松田修が解くところの「自己相似形としての相手」であり、「似吾」はむしろトギの原義に関わる用字といってもよからう。ただし、こ

の用字については別に私見がないでもない。⁽³¹⁾

六 最後についていわれる広義の御伽草子をどう呼ぶか

以上、トギの語の意味について漢字「伽」との関わりを通して考えてきたが本来の目的であった「御伽草子」の名称の問題と離れてしまった。

トギとは、徒然を慰める相手をすること、または相手という意味であることは少なくとも江戸時代まで変わらない（江戸時代にはその対象が狭まっただけのことである）。最初に引用した美濃部重克の説くように、現在に至るまでの広義の御伽草子に関する研究の成果によって、これらの共通点の中、「親しい者同士が集う座」すなわち「御伽の座」での享受の仕方に最も特色があると認められる以上、それを「御伽草子」と呼ぶことに異論をはさむ余地はない。

さらに、漢字「伽」の持つ言語性、宗教性もまた広義の御伽草子との関連が深いとも言えよう。偶然にも（いや偶然ではないかもしれない）、トギと漢字「伽」が結びついたと想像される室町時代後半が広義の御伽草子の中心の時代でもある。

今西浩子は「伽」の原義は『名義抄』の「対」の和訓「トグ」と関連するものであって「解き」とは別語であるが、「御伽草子」という命名は「絵解き」の「解き」に当時通用していた「伽」の意味をそこに掛け合わせたもの（「つれづれを慰める絵解きの草子」という考えによる⁽³²⁾）とする。

基本的にはこの今西説に拠りたい。今西の言う「解き」に当時通用していた「伽」の意味をそこに掛け合わせた」の部分を、筆者

なりの見解で言い換えれば「当時の漢字「伽」の持っていた「解き」の要素をトギ本来の意味に加えることによった」となるわけである。

以上のことから「御伽草子」の呼称を用いることは決して不当ではなく、むしろ積極的な意義があると考える。ただし、江戸の叢書「御伽文庫」の別名「御伽草子」と区別するため、また「御」を「敬称」というより「美称」というつもりで用いることを明確にするために、すでに様々な研究者によって使われてきた「お伽草子」という名称を用いることにすればよいのではないか。

註

- (1) 時代の幅をさらに広げ、上限は鎌倉末期あるいは南北朝、下限を江戸前期とする説もある。
- (2) 『中世小説の研究』（東大出版会、昭和30）
- (3) 柳田國男、折口信夫、桑田忠親、松田修、角川源義などの諸氏による論があるが、これらについては三、四節でふれる。
- (4) この二つの議論のきっかけとなったのが、桑田忠親氏の昭和十年代の諸論文（『大名と御伽衆』に収載）である。氏は、歴史学の立場から、御伽衆の研究を通して「御伽」が具体的に史実として現れてくるのは室町時代からであり、それは大名・殿様のものであったとする。従って、御伽草子とは本来貴人に対する草子を意味するのであって、通行言われているような婦女子のための草子ではないと論じた。
- (5) 「御伽草子序説」（『愛知大学文学論叢』第21輯、昭和36・2）この論文は、藤井隆著『中世古典の書誌学的研究 御伽草子編』（和泉書院、平8）に収められており、引用は本書所載の論文によった。
- (6) 「御伽草子の視界 御伽草子の呼称と範囲」（『解釈と鑑賞』61・5）
- (7) ジャンルの用語の観点からすれば、美濃部氏のように草子、物語、

小説と分類する方が適切かとも思われるが、たとえば岡見正雄氏の提唱された「室町ごろ」の「室町」を冠するかどうか叢書の場合、特に大きいような気がしてあえてこのように分類してみた。また(4)の奈良絵本等は形態に基づいた呼称であって、他のジャンルの作品をも含め収載しているので、ここであげるのは適当ではないかもしれない。ただ、収載作品の中心はいわゆるお伽草子なのであえてあげてみた。

(8) 国立国会図書館の蔵書目録によるものであって、正確な出版状況を示すものではない。再版や重版は含めていない。また上下冊あるいは複数の冊数を持つもので出版年が異なっている場合も一と数えている。

(9) 天稚彦物語等が「御伽草子」として収められている。

(10) 「御伽噺」は、そもそも「御伽の者がする話」であり、「童話ばかりをオトギなどと呼ぶことは、ほんの新しい一派の人だけがすること」と述べている。御伽はトギの敬語であり、目上の人の御相手の意味、すなわちトギは「相手」または「仲間」の意であり、現在も死語ではなく、地方で使われているとする。（『御伽噺と伽』柳田國男全集7巻「所収」）

(11) 明治二十四年（一八九一）に渋川版二十三篇の『御伽草子』（今泉定助ほか校注・吉川半七刊）が刊行されている。

(12) 桑田忠親「御伽草紙の本義」（昭和十三年五月稿、十六年十二月修正）『大名と御伽衆 増補新版』（有精堂出版、昭和44）所収論文による。

(13) 注2参照（東大出版会、昭和30）

(14) 「お伽及咄」（『国文学論究』6）『折口信夫全集第10巻』所収

(15) 山田俊雄による「伽」そのものに関する論考はないが、市古貞次の論考「御伽草子の意味」（『中世小説の研究』序説に収載）における註で次のように述べている。

「本稿執筆後、「類従名義抄」に「對」を「トグ」とよんであることを、山田俊雄氏の示教によって知った。同書、法下に一方、對 都内反 トグ コタフ ムカフ……タグヒ……カサヌ

- とある。むかふ、相對するといふやうな意味の動詞に「とぐ」ということばがあったらしい。山田氏はこの動詞の連用形ときから名詞ができたのではないかと、説かれたが、これは頗る傾聴すべき説である……」（『中世小説の研究』23頁註1）
- (16) 『日本国語大辞典 第二版』の「とぎ」の補注には次のようである。
- 「観智院本類聚名義抄」の「対」の訓にトグがあり、「伊呂波字類抄」「観智院本類聚名義抄」の「伽」の訓にヨルがあることから、そばに寄り添う意の動詞トグを考え、その連用形名詞と見ることができるか。」
- (17) 角川源義「御伽考」（『語り物文芸の発生』東京堂出版、昭和50）
- (18) 野村純一「お伽草子の『トギ』は何を意味するか」（『国文学』26、8）注10参照。
- (19) 荒木良雄「庶民文学としてのお伽草子」（『文学』19、10）（『中世文学の形成と発展』ミネルヴァ書房、昭和32）所収
- (21) 注17参照
- (22) 市古氏は七巻本は増補にしても鎌倉時代にはなっていたものとして、「無名草子」よりは後に鎌倉期の例として巻五の「大王ノカクテ行ヒ給コト希代ノ事也、御伽仕ルベシ」あげているが、その引用は「元禄六年版」によっている。この漢字表記「御伽」は後世の表記と思われる。筆者は後に述べるように、漢字「伽」がトギと結びつくのは鎌倉時代以降と考える。『日本国語大辞典第二版』では江戸初期の写本（九冊本・古典文庫）によっており、この部分は「御とき」と仮名書きである。
- (23) 以下、市古貞次「御伽草子の意味」（『中世小説の研究』）、同「御伽の文学」（『中世小説とその周辺』東大出版会、昭和56）による。
- (24) 松田修「お伽とお伽衆」（『日本芸能史論考』法政大学出版局、昭和49）
- (25) 東京大学史料編纂所が公開する「古文書フルテキストデータベース」「古記録フルテキストデータベース」「平安遺文フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」による。
- (26) 以下に引く用例は、「対」は異体字、和訓には声点を以て濁音をも示してあるが、これを新字、濁音符に改めて示す。
- (27) 諸本増補があるので慎重に扱わなければならないが、参照したものは次の通り。①中田祝夫・林義雄編『字鏡集寛元本影印篇』②『字鏡集白河本影印篇』（古辞書大系『字鏡集寛元本白河本研究並びに総合索引』勉誠社）、③前田育徳会尊経閣文庫編『字鏡集二十巻本』（応永本）（尊経閣善本影印集成、八木書店）、④秋本守英責任編集『字鏡集』（龍谷大学善本叢書、思文閣文庫）、⑤古辞書叢刊刊行会編『字鏡集』（第一巻国会図書館蔵本、第二巻大東急記念文庫蔵本の複製、雄松堂書店）、⑥古辞書叢刊刊行会編『字鏡抄』（永正五年写本複製、雄松堂書店）
- (28) 東京大学史料編纂所が公開する「古文書フルテキストデータベース」「古記録フルテキストデータベース」による。
- (29) 『篇目次第』には「サキラ」「カシコシ」「ノリ」の和訓がある。
- (30) 永禄11年の条にはこの二字の横に「ニタリワレニ」と振っている。但し、それが古い写本が散逸しているこの日記において、いつ書き入れられたかわからない。
- (31) 実は、『多聞院日記』において、「似吾」以外に「似我」と書くこともある。永禄十一年の先の条を遡って、天文頃には頻繁に見える。それは、当時毎月二十三日に「月待」のトギを行っているためである。これらの記述中、トギと仮名書きするか、「似吾」、「似我」の漢字をあてている。私は「似吾」よりもこの「似我」という用字が気になる。実はこの熟語は蜂の名として中世の古辞書に必ずと言っていいほど掲載されてきた文字面である。この蜂をこう呼ぶに当たっては俗説がある。「ジガジガ」と鳴くとか（名語記）、自分の巢に他の幼虫をひきこみ「似我似我」我に似よ」と言って自分と同じ蜂にすることからその名がある（壺囊抄）。この似我蜂とトギがどう結びつくか。それは、少し時代が下るが江戸の随筆にヒントがあるように思われる。次のような「似我の功德」という記述がある。
- 「仏語には、仏の万徳円満の心付て有る故に、誦する者に天然と功德備る也。是を似我の功德と云。似我蜂と云者、菜虫を子とし、似我

類、似我類とさせば、功積て天然に蜂となる也」(「鹽鞍橋」中
《一六六〇》)

すなわち、「似我の功德」とは、先の「壺囊抄」等にある俗説から、「道理を意識しないで一心に念じると、その功德で自然とその道理を体得できること」(「日本国語大辞典」を言う。先の『多聞院日記』で、トギが行われるのは二十三日の月待であったことは既に指摘した。そのトギとは、月の出る夜遅い頃まで人が集まり話したり酒食をしたりすることを意味するのだろうが、本来そのトギの中心は「一心に祈ると願う事が叶う」と俗に言われる二十三日の月待で、念仏を唱えることそのものをいったのではなからうか。天正年間の記事ではあるが『上井覚謙日記』では、二十三日の月待の記述が25ヶ所も存する。トギという語そのものは出てこないが、覚謙が一心に読経したという記述が多く見える。

そして、ここで改めて、『字鏡集』や『和玉篇』にある「伽」の和訓「ノリ」あるいは文明本節用集の「ヒジリ」の和訓を想起するのである。

(32) 「お伽草子の名称とトギの語義」『お伽草子の言語』(和泉書院、平成四年) 所収